

公開シンポジウム

大震災と教育

大地震・大津波とどう向き合うか 3・11から学校防災を考える

【報告】

- (1) 「宮城県の大震災における学校防災の教訓と その後の課題」
数見隆生(東北福祉大)・千葉保夫(宮城教育大学講師)
 - (2) 「学校事故と震災被害、そして防災のあり方を考える」
堀井雅道(立正大学非常勤講師)
 - (3) 「野田中学校(岩手県)の復興教育: 地域防災計画づくりへの生徒参加の試み」
村上純一(東京大学大学院生)
- <司会・進行> 三上昭彦(明治大学) 藤田和也(國學院大学)

2013年3月3日(日) 明治大学・駿河台キャンパス 研究棟4階・第一会議室

13:00受け付け開始 13:30~17:00シンポジウム(3つの報告と質疑・討論)

【JR お茶の水駅から徒歩5分 リバティータワー3階からタワー入口を背にして左奥の渡り廊下を進むと、そこが研究棟4階で、すぐに第一会議室があります】

3.11の大地震・大津波そして原発過酷事故から2年が過ぎようとしています。今回の被災は、あまりにも大きく広範囲で、いまなお地域の産業・労働・生活・医療・福祉・教育などの諸領域に、復旧さえままならない深刻な影響を与え続けています。日本教育学会は「大震災と教育」というテーマを特別課題研究として設定しました。

しかしマスコミに被災地・被災地の状況・困難が登場することが徐々に少なくなり、また同時に起こった東電原発過酷事故の深刻で広範な被害が目されるなか、最も多くの人命を(学校の児童・生徒や教職員、その家族を含んで)一時に奪った今回の大津波についての記録・記憶とその教訓が次第に風化するおそれさえ感じられるこの頃です。

本シンポジウムでは、自然の猛威を示したあの巨大津波の経験という、東日本大震災の原点の一つに戻って、子どもが、教職員が、学校が、親が、地域が、そのときあの地震・大津波とどのように向き合い、そしてそれ以降の事態のなかでも向き合っているかという事実について、私たちのこれまでの現地訪問のくり返しとそこから得られる「人間の、そして学校の津波との向き合い」に関する教訓を整理する形で考えたいと思います。

それは、今回の被災に止まらない、地震多発国・日本で数十年以内に、南海・東南海大地震や直下型地震が予想されている状況下では、日本列島にどこにいても重大な課題があります。今回の被災地に起こったこと、いまま起こっている事態は、

人間と自然の関係、地域づくりと園・学校の関係、園・学校建築の課題、保育者・教師の役割、自治体の役割、地域産業と子ども・学校の関係などにおいて、貴重な体験と実践、困難の深さと創意・工夫などの点で、日本の教育の在り方を考え直す多くの課題を提起しています。その研究活動の一環としてこのたび、「大地震・大津波と学校防災」というテーマに絞って被災地の状況を踏まえて交流し、同時に今後への教訓を明らかにするシンポジウムを以下のように企画しました。これは、教育学会員内・外に公開の形で開催されるものです。皆さまの参加をお待ちしています。

主催: 日本教育学会・「大震災と教育」特別課題研究グループ 研究代表: 日本教育学会会長・藤田英典